

P-57

富山大学附属病院薬剤部における和漢薬実務実習への取り組み

○加藤 敦、蓑島由佳、三村泰彦、足立伊佐雄
富山大学 附属病院 薬剤部

【目的】近年、高齢化や疾病の複雑化、健康志向の高まりによって、和漢薬などの補完代替医療が注目されている。また薬学教育においては、平成14年9月に日本薬学会から「薬学教育モデル・コアカリキュラムおよび薬学教育実務実習・卒業実習カリキュラム」が提示され、実務実習の重要性が明記された。このように、医療の担い手としての薬剤師の質の向上が求められる中、薬学教育において不足しているとされる実務実習での病院・薬局薬剤師の役割は大きい。一方で、実習内容および質は個々の受け入れ機関に委ねられており、その標準化が重要な課題である。富山大学附属病院薬剤部では、モデル・コアカリキュラムをもとに、6年制に対応したより実践的な実習を行うためのプログラムを策定中である。今回、富山大学薬学部4年次生を対象とした学内病院実習において、学生の意識調査および実習プログラムの有用性と問題点を検討したので報告する。

【結果・考察】今回の実習プログラムでは、模擬処方箋に基づいた和漢調剤の実践、監査の際必要とされる生薬鑑別、疑義照会や服薬指導の際に重要な和漢薬の副作用や西洋薬との相互作用を中心に行った。事前に実施したアンケート調査では約8割の学生が「和漢薬に関する知識・技能が必要」と感じているものの、生薬に触れる機会が少なく、葛根・麻黄といった代表的な生薬ですら約7割の学生は鑑別することができなかった。また最近では、和漢薬の有用性が見直され西洋薬との併用が多く認められるが、模擬処方箋を用いた処方監査において、和漢薬の副作用や西洋薬との相互作用に全く注意を払っていなかった。その原因として、約4割の学生が和漢薬に対して「体にやさしい」「副作用が少ない」というイメージを持っていること、個々の生薬の主要成分およびその構造に関する知識が極めて乏しいことが挙げられる。実習後の意識調査では、8割以上の学生が「大変満足」または「満足」と答え、和漢薬に対する興味が増したと回答した。しかし、薬としての和漢薬の位置付けや西洋薬との相互作用に対する認識が不足している現状が明らかとなり、今後これらの項目についてより重点的に指導していく必要があると考えている。

P-58

薬局における短期実習での生薬学・漢方薬学導入の試み(1)
～6年制長期薬局実習に向けて

○大庭信行
島根県 高津オオバ薬局

【目的】平成18年度より薬学部6年制がスタートし、新カリキュラムによる講義実習などが開始されている。5年次には各2.5ヵ月の実務実習が盛り込まれていることから、従来の4年制における薬局や病院での実習においてもさまざまな取り組みが試みられている。長期薬局実習では「薬局製剤・漢方製剤」の項目があり、刻み生薬などに実際に触れる機会も設定されているが、現実に扱っている薬局は限定されるため、他の薬局での実習を委託することも認められている。その場合も実習受入薬局の認定実務実習指導薬剤師の責任で委託することとされており、そのためにも実習受入薬局で委託分野の指導を事前に行っておく必要がある。こうした背景から、医療用医薬品、一般用医薬品、薬局製剤のそれぞれに存在する生薬、漢方薬などを短期薬局実習で積極的に取り上げる試みを行った。【方法】漢方方剤の把握ができるように、医療用・一般用漢方薬の添付文書、薬局製剤・漢方方剤の解説書などを用いて説明を行った他、演習に取り組んでもらった。さらに実際の処方箋や薬歴簿なども用いた実習を行った他、天然由来成分がリード化合物として開発された医療用医薬品や天然物配合剤などが実際の医療現場において使用されていることも積極的に実習で触れた。【結果】大学での生薬学などの講義、実習とは異なる視点からの実習を行うことによって、短期間の薬局での実習ではあるが、生薬、漢方薬などが実際に臨床現場においてさまざまな形で用いられている薬剤であることを実習生も実感したようである。【考察】実際に6年制長期実習が実施されるのは平成22年度のことだが、それまでにさまざまな具体的な整備を行ってゆく必要がある。この中で、「漢方薬・生薬認定薬剤師」の活用も含め、本学会や生薬学会などに関係している大学教員が、現場の薬剤師と連携整備してゆくことを提言したい。モデルコアカリキュラムでは、生薬系分野は化学系薬学に分類されているが、実際には基礎、創薬、臨床がそれぞれ密接に関連していることを認識できる重要な領域である。実習生が大学での講義実習などの理解を真に深めてゆくためにも、いわゆる漢方薬局が実習に協力してもらう意味においても、この領域に関わる大学教員と現場薬剤師とが連携を充実させてゆくことが今後重要である。